

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



槇子の工房に通う日は、なぜかいつも雨がふる。

それもこの日は、朝からしのつく雨である。週に一度、五月の末から通いはじめてこの日は四度目だった。

万作はすぼめた傘の先からこぼれ落ちる水滴を気にしながらバスに乗り、窓際の席に座った。窓ガラスのくもりを人差し指と中指の甲でぬぐい、外をながめる。見慣れた光景が目の前を流れはじめ、万作は目をつむった。

工房で作陶に取り組む槇子の姿が目には浮かぶ。

彼女はことさら万作に教えることはせず、作業台で自分の作品にむかっている。見て真似ているうちに、自分で覚えていくものだという。それで万作は槇子が土を練り、ひも状にした粘土で花器の形をつくっていく過程を観察していることが多い。いま、彼女は大きな花瓶をつくっている。万作の目には肩や口が歪んで見えるので、この前そのことを指摘すると、その歪み具合が難しいのだ、と槇子は腕を組み首をかしげていた。

バスがとまる気配で目がさめた。

信号待ちだった。ひよいと道路に視線をおとすと、追い越し車線にベンツがとまっている。鳥肌のような水滴を浮かせた白い車体は、倉田のものと同じである。おやつと目をこらし、運転しているのが倉田であることを確かめた。すぐ、助手席の女に目をやる。バスの窓から女のよく張った腰まわりや、ぴたと揃えた両脚の白い太腿がそっくりみえる。女はスカートの上に両手を揃え、目を閉じていた。細面のその顔には見覚えがあった。

みね子である。二人はこの雨の降る昼中、どこに出かけるつもりなのか、ベンツは交差点で右折し万作の視界から遠ざかった。

この日、正岡青年から槇子のもとへ銀蔵翁の所在について情報が入っていた。徳山に住む息子夫婦のもとへ引き取られていた別府銀蔵は、九十歳を迎えたこの春から体調をこわし、山口の病院へ入院したままになっているという。槇子は今も明日にでも会いにいきたい、と万作の都合を訊いた。

「ぼくも一緒に、構わないのですか」

万作はためらった。

「あら、どうしてですか」

「ぼくまでが行くと、別府さんは何事かとびっくりしますよ」

「まあ、そんなこと」

槇子は心外な顔になった。

「正岡君を誘えばどうでしょう。山口はちょっと遠いから、ぼくは報告を楽しみに待っていますよ」

と万作は分別くさくさいった。槇子と行くのは気が重い。

「当の先生が行かないで、どうするんですか。シンポで発表なさるのでしょ。」

なにか分かるかも知れないのに……」

槇子は万作から視線をそらし、制作中の花瓶を見つめる。

「村下集落と別府銀蔵さん、かりに何か昔からの伝承があるにしても、それが一遍とかかわりがあることは、とても思えません」

槇子は向き直り、驚いた顔で万作をまじまじと見つめ、

「先生、そんなこと、本気でおっしゃるのですか」

と声を高めた。万作は真面目くさって言わずもがなのことをいった。

「伝承は大切です。しかし往々にして真実とは異なるものです」

「そうですか。だったら、わたし、ひとりで行きます」

「ひとりで？」

「先生が行かなかったら、他にだれが行きますか？」

と槇子は叫ぶように気持ちをおつけた。

「分かった。申し訳ない」

万作は頭をさげ、それから槇子を見つめ深く頷いた。

槇子は、涙をぬぐい取るかのように右の手の甲で顔をこすり、

「きつと良いことが聞けそうです。わたしそんな予感がするんです」

と顔を輝かせる。

「日帰りできますか」

万作はこだわっていた。

槇子は諭すようにいった。

「朝、少し早く出発すれば大丈夫です」

「そうですか、この齢ですから早いのは平気です」

万作は生徒のように律儀に頭をさげた。

出発は次の日曜日に決まった。

万作は工房の隅で土造りをした。

気持ちが高揚し、手がよく動いた。黙々と土を練りながら、万作は倉田や自分をめぐって、何か大きなものが鼓動し始めるのを感じる。いま、人生の最後の坂に二人がさしかかったのかも知れない。そう思うと自然と腕に力が入った。丸く土を転がし手びねりすると、ひとかたまりの土が万作の掌の上に座っていた。まだ顔も手も足もないが、踊る一遍の姿が土の中に隠れている。かれは、踊り念仏に陶酔する時衆の群れを土の中から呼びだそうと思っていた。

一体の土像を雪見障子の前に置いてじっと見つめていると、槇子がろくろを回す手をとめて万作の肩ごしに、

「息をしている。窯にいれたら動きだすわ」とささやいた。